

【東京】医師が憧れる「かつこいい中小病院」へコミュニティ・ホスピタル化進める-小笠原雅彦・同善病院副院長に聞く◆Vol.1

2023年3月17日（金）配信 m3.com地域版

「地域の中小病院で働くのって、かつこいいよね」――。医療者から見た従来のイメージを刷新しようと活動する若手医師らが東京・下町にいる。「同善病院」（台東区）の母体は明治期に生まれ、地域ニーズに合わせてさまざまな事業を行ってきた。そして今、病院が目指しているのが医療やケアをワンストップで提供し、地域活動にも力を入れる「コミュニティ・ホスピタル」だ。小笠原雅彦副院長に、法人の変遷と目指す病院像を聞いた。（2023年2月2日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



小笠原雅彦氏（中央）など同善病院の医師たち

――病院の運営母体「同善会」は明治期に誕生し、教育をはじめ複数の事業を行った後、病院を作ります。変遷がユニークだと思いました。

「地域から必要とされるものを提供しよう」が同善会の理念だったと聞きます。会の発端は1886年（明治19年）、現台東区の下谷（したや）区で小学校の授業を始めたことにさかのぼります。その3年後に「同善尋常小学校」と称して認可を受け、1904年に財団法人同善会が誕生しました。

創設者の久保田量寿氏は「貧困層を教育の力で引き上げ、より良い地域にしよう」と活動を進めました。久保田氏死去に伴う代替わりを挟みつつ、小学校、夜間学校、保育園、専修学校、児童相談所を平成にかけて開設・閉鎖してきました。

――資料によると、被災者救護や就労支援にも取り組み、助産所を運営していた時期もあります。

「地域から必要とされるもの」が理念にあったためでしょう。1923年（大正12年）の関東大震災、1945年（昭和20年）の東京大空襲のときは法人の施設を宿泊所として開放し、数千もの被災者を収容・救護したそうです。さらに戦後は職を失った人を支えようと、相談所や洋傘を作る作業所を一時的に運営しました。

事業を行うなか、徐々に地域に住む人が増え、出産して子どもを育てるサイクルが生まれました。助産所の開設はこうした背景があり、1956年の産科病院立ち上げにつながります。

――最初は産科病院だったのですね。それから療養型に変わり、2006年に病院は医療法人化されます。

少子高齢化が進み、地域に高齢の人が増えるなかで療養型に機能を変えました。2007年には法人の外來部門として病院の近くに「同善会クリニック」を開設し、2009年に病院は回復期リハビリテーション病棟として認可されました。

なお、産科病院と保育園を運営していたころ、「同善（病院）で生まれ、同善（保育園）で育つ」のは人気のコースであり、一種のステータスとして見られていたようです。地域の高齢の人に「同善」はなじみのある名で、私が病院について話していると、「ああ、あの（同善）」と反応してくれることもあります。



同善病院の外観（病院提供）

——地域に親しまれてきた歴史があるのですね。病院は2022年から「コミュニティ・ホスピタル」を目指しているとか。

総合診療を軸に、超急性期以外の医療・リハビリ・ケアをワンストップで提供し、地域に入り込んで健康増進も担う病院を私たちは「コミュニティ・ホスピタル」と呼んでいます。医療者に向けては、「地域医療を教育できる病院」と私は説明しています。総合診療を安定して提供できる一方、総合診療を担う若手医師や多職種の育成場所としても機能することを目指しています。

コミュニティ・ホスピタルを掲げる病院の場合、その姿は個々に微妙な違いがあるかもしれませんが、当院では外来診療・入院医療・在宅医療を提供しつつ、定期的に地域の活動やイベントに参加したり、地域に向けてイベントを開いたりしています。当院の総合診療専門医または総合診療専門医を目指す専攻医は基本的に外来・病棟・在宅・地域活動の4部門を担っています。

——既に、総合診療専門医の育成場所になっていると。

当院のコミュニティ・ホスピタル化は現在、医療コンサルティングなどを行う企業「メディヴァ」が担っており、愛知県の豊田地域医療センターが人材支援をしてくれています。メディヴァとは当院が療養型のころから付き合いがあり、2015年に事業承継をして経営権を得ました。しかし、変革を推進していく人材がなかなか集まりませんでした。

一方の豊田地域医療センターは以前からコミュニティ・ホスピタルをテーマに運営しており、総合診療医の育成に注力しているため、教育場所の確保が課題となっていました。「人がほしい」メディヴァと「場所がほしい」豊田地域医療センターが意気投合した結果、2022年4月に私をはじめ在宅医療の経験がある医師3人が加入し、本格的に在宅医療を始めました。

——時代に合わせて変化してきた法人が、今度は患者の人生を長く支えていく病院に生まれ変わろうとしている。

中小病院の新しいモデルをつくりたいと考えています。現在、全国には5000もの中小病院がありますが、経営に苦しんでいるところが少なくありません。経営は成り立っているものの、そこで働く人が十分に輝いていないケースもあるでしょう。

そんな医療者の印象を変えたいんですね。私たちが目指しているのは、「地域の中小病院で働くのってカッコいいよね」と多くの医療者が思う状況をつくること。医師であれば、総合診療医になってコミュニティ・ホスピタルでリーダーとして働くキャリアをメジャーにしていきたい。現在、総合診療医の勤め先は大病院の総合内科・総合診療科かクリニックのいずれかになりやすいので、そこに、「コミュニティ・ホスピタル」という第3の、それでいて魅力的な選択肢を提供したいと考えています。

◆小笠原 雅彦（おがさわら・まさひこ）氏

2014年名古屋大学医学部卒。豊橋市民病院での初期・内科研修後、同大の総合診療専門医養成プログラムに入り、総合診療を学ぶ。豊田地域医療センター・在宅医療支援センターの副部長などを経て、2022年から同善病院の副院長、在宅医療センターセンター長、コミュニティ支援室室長。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

